

Tyrannosaurus

異なる天空は実在する。
ティラノザウルスでそれを識った。
ティラノザウルスをきくと、私は異なる
天空に翔んでいく。ギリギリッと
きしむギターとねじくれたヴォーカル
とで、脳髓の歯車がギリギリッと
巻かれていくのがわかる。この世は
動きを止め、私はこの世からはかれ
る。
映画「ロッキー・ホラー・ショウ」で若い
カップルが車の中、道に迷い、
怪しげな館に、助けを求めて入って
いく。館の主人も召使いも、客も、
みんな異なる天空からの異星人たち。
館で体験したことは、互いがその
体験の証人である若い2人のこの
世でのその後の人生をどんなものに
するのだろうか？ティラノザウルスが
それを考えさせる。



THE ROCKY HORROR
PICTURE SHOW

この世の人間に対しては起り得
ない想い。それがティラノザウルスをきくことで想起される。すると、
この世は動きを止め、私はこの世からはがれて、物体を視るよう
にこの世を視ている存在になってしまう。「夢を見るな、夢になれ」
という歌詞が「ロッキー・ホラー・ショウ」の中にあっただけ、そう、私は
夢を見ていないじゃなくて、夢になっている、そんなときは、現実の
生活から時間のかすめとして、夢になって、夢に生きて、燃えて
いられた分だけ、深く深く夢に生きられた分だけ、強く強く燃えて
いられた分だけ、この世の現実生活は、平和、平穏になる。
「ロッキー・ホラー・ショウ」の中のあの若い2人のこの世でのその後の
人生も、こんなふうなのだろうか？
そして、異なる天空に往ききりになってしまうことであるのだろうか？

あの晩こそ運命の十字路にわたしは立っていたのであった。もし
わたしがわたしの発見を運するにより崇高なる精神をもってし、
高潔敬虔なる向上心に動かされてあの実験をとり行なったの
ならば、すべてはまったく異なる結果をもたらしたであろうし、ああした
生死の苦しみのなかからわたしは悪鬼としてではなく、天使として
あらわれ出たことであろう。薬そのものはなんら差別的な作用は
なかった。それは神を生むものでも悪魔を生むものでもなかった。
ただ単にわたしの気質を開閉込めている獄舎の扉を揺さぶるに
過ぎず、閉じこめられていたものがスリッパ市の囚われ人のごとく
走り出て来ただけのことである。あのときちょうど私の徳性が
うたたねをしたその隙に、野望のために目をさましていたわたしの
悪が目ざとくもいちちはやく機会を掴み、かくして投影されたのが
ほかならぬエドワード・ハイドなのであった。それゆえにわたしはいまや
二重の容貌と二重の性格の持主であったが、その一つは完全なる
悪であり、他の一つは依然として昔ながらのヘンリー・ジキル、
すなわち、矯正も改善もすでに絶望となったあの調和せざる
混合体であった。かくてまったく悪への一途を辿るに至ったのである。

ロバート・ルイス・ステイヴンソン著
「ジキル博士とハイド氏」より

「永いあいだ夢の中という牢に鎖いでおいた私が、目覚めている
ときの私の肉体を獲得した。牢の中でたふさく夢を喰って生きつづ
けていた私は、現実生活で思考や論理に鎖られ、寝て覚え、
へとへと私の私を打ち倒すまでになった。金貨をセカった者はティラノザ
ウルスのギターであっただろう」と4号(1989.12.16発行)に書いた。
「ジキル博士とハイド氏」を最近読んで、上記のところが、1年前に
はじめてティラノザウルスをきいて私に起ったこととあまりにも
酷似していて呆然となった。ヘンリー・ジキルの場合は薬が、
私の場合はティラノザウルスのギターが、獄舎の扉を揺さぶり、
閉じ込めてあったものが走り出てきた。

LIVE: 1990.8.19 渋谷ラ・ママ

はじまりの音楽なしで、いきなり「COCK SUCKER BLUES」がはじまった。
さいしょのギターのジェーンという者をきいたとたんに「やったァ!」と思う
までもなく歌になって、いままで一番、というくらい魅惑的なヴォーカル。
こうなると、メイクもコスチュームも実にはきまってる。はじめからあわ
りまで、ほとんどヴォーカルの人がばかり見ていた。ギターも1人だけだ。
どうしてもヴォーカルの人に目がいった。
ライブが終わって、ラ・ママを出て馬場へむかう坂を降りていくと、
あたりの建物や、まばらな通行人が見えた。そのとたん「あ、これが」
この世というものがたんだ。ティラノザウルスをきいているあいだ、
私は一瞬もこの世には存在していなかった」ということばが
わきあがってきて、涙があふれ出た。ティラノザウルスの音楽によって
私はこの世とは完全に別のところに在った。この世に結びつけ
られている私はどこにも在なかった。ティラノザウルスの魔法の
ジュータンにのって往ってきたのぼどこだったのだろうか？
涙がでるほどの感動の旅だった。

LIVE: 1990.8.30 大宮フリークス

「COCK SUCKER BLUES」ではじまって、その一曲だけで、もうデッパン
までいっちゃったって感じ。ほとんどしゃべりがなくて、ダーッと曲を
つづけてやって、メチャメチャすごい。前半はヴォーカルの人に目がくま
づけ、後半はギターの人に目がくまづけ。あのギターの人って、すごい
ギターを弾いているときって、言葉の沈黙の重さと深さを強く
感じさせる。言葉が閉じこめられる。ヴォーカルの人の溢れるような
めくるめくほどのゆたかな歌謡の中にあると、よいけい。
ティラノザウルスの音楽の中にいて、あのギターの人を見ていて、美が
溢れていくと、限りなく醜に近づいていくんだとわかった。
すぐ隣りに醜怪がある。その隣までいっている美。

LIVE: 1990.9.16 渋谷エックスマン

マーク・ボラン追悼ライブ。この日はマーク・ボラン
の命日なんだけど、私にとってはティラノ
ザウルスに出くわしてちょうど一年目の日。
演奏がはじまる前40分くらい、マーク・
ボランとT・REXがスクリーンにうつし出さ
れた。涙をうかべてスクリーンのマーク・
ボランに入っている人もいた。

そのあとティラノザウルスのオリジナルを
1時間くらい。最近のティラノザウルスは、やる
度にその凄さを増している。曲と曲の間に
話がほとんど入らず、曲をつづけてダーッと
やるから、その凄さが加速、加重される。さいしょの一曲で、もうなんかを
つかひはたしてしまう感じがするほど。映画「ロッキー・ホラー・ショウ」では
異星人だったけど、ティラノザウルスもステージの上ではそんなふう。それを音楽
でつくり出せるって、すごいよ。

T・REXのカバーがはじまった。私はT・REXにもマーク・ボランにも心とめ
れるものはない。だけど、ヴォーカルの人が自分の好きな曲という
やっさいの何曲かには深くひびかれた。ステージではいつもは
そのまま出さないから、いままでほとんど感じたことのないヴォーカルの
人のむき出しの心が感じられ、ヴォーカルの人が、どんなふうにとどのくらい
マーク・ボランを愛しているかわかった。命日から思い出す、といった
ように愛しているんじゃない、マーク・ボランを、その音楽を通して深く
愛している。音楽から深く感じていること、深く共感していることと
T・REXのカバーをやることで表現している。その美しさ、愛する美し
さにうたれ涙がにじんだ。音楽を通してでも、思想を通してでも、
生き方をを通してでも、なんでもいいたけど、人を敬愛する、人を
尊敬するって、その人をどんなふうにとどのくらい敬愛しているかを
他人に語ることはなんかじゃない。その音楽、その思想、その生き方
に自分も生きることだ。実践することだ。それは語ることもなんか
よりも、ずっとずっと苦しい。けれども、ずっとずっと美しい。



今回、金部ティラノザウルス、T・REXもマーク・ボランも全く知らなかった
私が(いまでもよくわかっていないけど)、1年前にティラノザウルスに出くわ
した。それからたった1年で、こんなところまで来てしまった。